

# イスラームを世界史教育に

## どう位置づけるか

外語短期大学附属高校 石 橋 功

はじめに

イスラームを世界史の中でどう教えてきたか、以前は、世界史Bのなかで私はこう教えてきた。位置づけは古代文明の成立のあとであり、ヨーロッパ中世の前で扱う。イスラム教の成立、イスラム帝国の拡大、イスラム帝国の分裂、モンゴルによる征服という展開で一段落させ、ヨーロッパ中世にいき十字軍のところで扱う、次にでてくるのはヨーロッパ勢力のアジア進出の前の状況であり、征服される対象地域として扱う、その後は、この地の独立という観点から見えていったわけである。

こうした教え方は十年前は極めて普通のものであり、若い教員が少なく、「古い歴史」で大学を卒業してきた多くの神奈川の教員のなかでは今だに行われている展開ではなからうか。こういった展開は言うまでもなく、二つの前提から成立している。一つは、ヨーロッパ中心史観である。そもそも古代、中世、近代という枠付け自体がヨーロッパの歴史的展開をもとに成立した区分であり他の地域にこの区分を押し付けるのは無理にもかかわらず押し付けられてきた。イスラームは中世の区分にいられ、近代の打倒の対象とされてきた。この見方の限界を突きつけたのが一九七九年以降のイスラーム原理主義回帰の動きである。従来の見方であるならイラン、アフガニスタンなどは中世の回帰に他ならなかった。

もう一つの前提は、ヨーロッパ中心史観と重なるが、近代に成立

した国民国家をあたかも自明のこととし、国民国家を前提に歴史を語ることである。現在の「日本史」が成立していることがイスラームを教えることをむずかしくしている。こういった前提をどう克服していくかは、単にイスラームだけの問題でなく二一世紀の歴史教育に極めて重要な問題と考える。

本稿では、最初にイスラームを指導要領がどういった変化をもったかを検証し、さらにイスラームの中で従前の世界史ではほとんどふれられることが少なかったアフリカのイスラーム化をみていきたい。

### 指導要領上でのイスラームの取り扱いの変化

指導要領上でのイスラームの取り扱いの変化を確認しておこう。

用語について、イスラームからイスラームに変化しているが、イスラームをどの視点で見るかでの変化の理解は深い。欧米から見たイスラームからイスラーム社会からの視点を入れたイスラームと叫びかたへの変化である。これと同様にコーランはクルアーンへ、メッカはマッカに、メディーナはマディーナに変化していこう。アラビア語ではア、イ、ウという母音のみで、エ、オという母音は存在しないのだから今までの世界史表記の流れからすれば当然の方向に立っている。またイスラームそのものが「神を信仰すること」の意味であるからイスラーム教では、正確には「イスラム教」になつてしまうからイスラームで止めるのが当然である。最後にアラブ人とは「アラブとは、連帯の絆として、意思疎通媒体としてのアラビア語と、アラブ・イスラーム帝国の文化遺産に対する誇りを共有する人々」というのであるから、アラブ民族という人種が存在するような記述は避けるべきであろう。

次に歴史的視点に限定されがちであった旧指導要領に対して、世界史を通して現在の世界を知るといふ必修世界史の視点がより高まっている点である。日本人にとって最も理解しづらいイスラームを歴史的に学び、現在を知るには当然のことである。

そして、過度のイスラームの強調が収束している点である。日本にあつては世界史教師は従前、東洋史といふかたちで中国史を学んでくるか、西洋史でヨーロッパ史を学んでくるかであった。このため、この中に含まれない地域の理解が著しく欠けており、特にイスラームに対する理解は世界史教師において決定的に欠落していた。そのため旧指導要領においてはイスラームを強調することにより、中国、ヨーロッパ以外の重要性を強調したわけであるが、今は東南アジア、アメリカ等イスラーム以外の地域の理解の重要性が高まったこと、イスラームは一つではなく諸地域で多様な形を取ることが理解された結果、過度の強調が失われた。

最後にネットワーク論から見たイスラームの重要性を強調している点である。「砂漠の宗教」ではなく「都市の宗教」としてのイスラームはその多様性と寛大性から商業ネットワークをつくるのには適したものであった。そういう意味では世界の一体化を進めたイスラームという点で欧米中心史観に正しい視点を与えたといえる。

ただ世界史Aにあつては従前、かならず学ぶ内容が一八、一九世紀以降の世界であつたのに（産業革命、市民革命以降）、一五、一六世紀の大航海時代からになったことは、ヨーロッパ中心史観に先祖帰りする可能性をもった措置であつた。たしかに、一八、一九世紀からだといふ「進んだヨーロッパ、遅れたアジア」の見方が増幅される可能性があること、産業革命、市民革命がはたして近代への切れ

目と考えることが可能かの問題からこういった措置がとられたのであろう。しかし大航海時代といつても、アジアに関してはイスラームの豊かなネットワークにヨーロッパが軍事的優位をもつて強引に入り込んだだけであり、アジアの枠組みを変える変化を与えたわけではないのだから、ここから始めるといふのは従前の高校教師の「やりやすさ」に答えた措置といえよう。

#### アフリカのイスラーム化

イスラームを取り上げるとき、最も世界史で従来無視されてきたアフリカ史の中でイスラーム化がどう進み、どう独自の文化を形成したかをイスラームのネットワークを中心に見てみたい。イスラーム化という時、我々はイスラーム帝国の征服活動に伴うイスラームの広がりや想定し、その後のイスラームの広がりやイスラーム化の概念を生徒に与えてきた。この時、我々は知らず知らずのうちにイスラーム化とアラブ化を混在化させ、結果、シーア派のイランと近代化されたトルコを除いて、イスラーム世界IIアラブという概念を与えてしまう傾向が強かった。そしてイスラーム社会の説明で一時的なイスラームのイメージを生徒に与えてしまう傾向にあつた。はたしてそうなのか。こうした従来の概念では、アラブ化しなかつたサハラ以南の東アフリカのイスラーム化と西アフリカのイスラーム化はなかなか説明しづらいものとして存在した。そしてアフリカの未開性とセットにし、アフリカのイスラーム化は帝国主義支配の中で広がっていくものと理解されがちであつた。（帝国主義支配に対抗するものとしてイスラームの旗を掲げた改革・抵抗運動があつたのは事実であるが、こうした地域はもともとイスラーム化した地域がほとんどで、改革・抵抗運動の延長上にイスラーム化した地域は少

なからう) 我々は現在、キリスト教が従前言われてきたような、堅い戒律的宗教でなく、様々なキリスト教があることを知っている。禁欲的なキリスト教から快樂的なキリスト教(ゲルマンの風習のカルナヴァールを受け入れたキリスト教をさして言った)まで。ところが、イスラームになると以前のキリスト教のような一律的なイメージを持ち続けている。イスラームもその地域にあったイスラームが選ばれ、その地域の以前の文化と融合する形でイスラーム化がすすんだ。そのなかには言語もアラビア語とし、自分達はアラビア半島からきたと信ずるアラブ化がすすんだ地域もあった。イスラームの初期の征服活動によってイスラームの勢力下にはいった地域がこれにあたる。しかし、この領域に倍する地域がアラブ化することなくイスラーム化した。現在、最大のイスラームの国、インドネシアを始め多くの国はイスラームの商業ネットワークをとおして、イスラーム化していった。そうしたイスラーム化の具体的なものを、東アフリカと西アフリカで見よう。

### 東アフリカのイスラーム化

この地でのイスラーム文化は現地のバントゥー語の文化と混合したスワヒリ文化である。現在、スワヒリ語はアフリカの言葉で最も日本でポピュラーな言語となっている。スワヒリという言葉はアラビア語において沿岸部を意味するスワーヒルを語源としている。ここではスワヒリの源となった東アフリカの沿岸部のイスラーム化の歴史をみてみたい。

この東アフリカ沿岸部は古くからヒュパロスと呼ばれたインド洋の季節風を使ってアラビアとの交易が行われていた。この交易に携わったアラビア商人は一一〜三月の北北東の季節風に乗ってアフリ

カ沿岸部に住居し、四月〜一〇月の南西の季節風に乗って帰っていた。この風待ちと交易の為此の地にいる期間に商人達が現地妻を持つケースが多かったようである。そして、アラビアとバントゥーの混血児が生まれるようになった。こうした関係上、イスラームの伝来は早い時期であったようだ。七世紀末には、イスラーム都市モンバサ、サンジバルが建設された。又、ペルシアのシーラーズの英雄が移住してきて都市キルワを建設したという伝説が生まれたのもこの頃である。これらの都市はインド洋交易網の中、イスラームネットワークの重要な地位を占めた。この地から、持ち出される金(ジンバブエ付近産出)、象牙は中国にまで運ばれる場合が多かった。この結果、一四〇五年に始まる明の鄭和の南海大航海が、モガジオ、マリンディにまで及んだことは、そのことをよく象徴している。(中国陶器の破片がこの地の遺跡から多く発見されるのもこの交易の多さをあらわしている。)この少し前、一四世紀にキルワを訪れたイブン・バットゥータはこの都市をつぎのように著している。「世界でいちばん美しい整然と作られた町の一つである。」

こうしたイスラームの豊かなネットワークに割り込んだのがポルトガルである。ポルトガルのガマの船は鄭和の船の四分の一程度の小舟でアフリカの人はこれを見下したのであるがこの小さい船は大きな火力を持っていた。この火力により、一六世紀には東アフリカ沿岸部はポルトガル支配下になっていった(こうした時代ポルトガル領のモザンビークを訪れたのが天正遣欧使節日本の少年達であった)。胡椒貿易において、一六世紀ポルトガルはイスラーム商人に敗北したように、このポルトガル支配が後のヨーロッパの優位に直接伝わるわけでない。一七世紀になると、アラビア半島東南部のオマ

ーンがポルトガル勢力を駆逐してこの沿岸部を支配し交易の支配権を握っていった。

ポルトガルがこの地を支配し、アラブ人の役割がへるとこの地にスワヒリ語が広まっていく。そのスワヒリ語の広がりこそ、この地のイスラーム化の道に他ならなかった。

### 西アフリカのイスラーム化

ここではサハラ以南の西スーダン（現在のスーダンの地という狭い意味でなく、アラブ人が「黒い人々の地」とよんだニジェール川流域からナイル川にかけての地域をさす）のイスラーム化をみたい。この地域はイスラーム化はしたが母国語としてアラビア語を受け入れなかった地域である（マンデ語が主な言語である）。

西スーダンで歴史上最初に登場する王国は、八世紀以前に成立したと見られるガーナ王国である。この王国を造ったマンデはマンデインゴとも呼ばれ古くから地中海世界で知られていた民族であった。このガーナ王国の経済的基盤はバンブクの金鉱であった。この金鉱は「黄金の島」ワンガラと呼ばれ、この金を扱う商人はワンガラ商人と呼ばれるようになった。この商人達のイスラーム化がすみ、次に、都市においては商人を中心にイスラーム化したのが王は森に住み農人は伝統的な宗教を守る立場を守っていた。このガーナ王国を征服したのがムラービト朝である。このムラービト朝はベルベル人が西サハラの神秘的イスラームの宗教運動によって成立した王朝で、イスラームを使ってアラブの支配に抵抗した歴史を持つ興味深いベルベル人が建てた国である（スンナ派のアラブに征服支配されたベルベル人にとって最初は異端のハワリジュ派を受け入れたことはイスラームを受け入れながらアラブ支配に抵抗する格好の思想

手段であった）。このムラービト朝の征服（ジハード）によって一〇七七年ガーナ王国は滅び、西スーダンのイスラーム化が進む。

一三世紀にこの地にイスラーム王国、マリ王国が形成される。この最盛期の王が一三二四年にメッカ巡礼を行った有名なマンサームーサである。この王が大量な金を運び、道中のカイロで気前よく金を喜捨した結果、カイロの金相場が下落したという有名なエピソードが残っている。この王がたくさんの建築家や学者を連れてかえりトンブクトゥに大モスクを建てた。ここに「幻の黄金都市」トンブクトゥの歴史がはじまる。このトンブクトゥとジェンネの交易都市を所有し、一五世紀からマリ王国に代わって栄えたのがソンガイ王国であった。このソンガイ王国を一五九〇年滅ぼしたのはモロッコ島から来た元キリスト教徒とムスリムのアンダルシア人であった。この征服がイベリア半島におけるイスラーム国家の消滅に対しての不満をそらし、逃亡してきた人々の有効利用したものであった。この成功によりモロッコには年間一トンの金もたらされるようになった。ガーナ、マリ、ソンガイの繁栄を支えたものは、ここで産出された金とナッツ（コーラの実）である。この物品と塩の交換交易がイスラーム商人の利益であった。交易と金が強調されるが、当時水量に恵まれたニジェール川の農業生産がこれらの国の背景にあったことは言うまでもないことである。

東アフリカも西アフリカも独自のイスラーム文化が栄えたわけであるが、共にヨーロッパの征服に忘れ去られ「暗黒大陸アフリカ」を形成していった。